実践研究

私の保育ノート

ひとりの保育士として

丹羽 瞳
（保育士）

私は、２０１８年の３月に大学を卒業し、４月から、０～２歳の子どもたちが集う学内保育施設、いずみナーサリー（以下、ナーサリー）で保育士をしています。

今回、学生時代から拝読していた「私の保育ノート」への執筆の機会を頂き、あらためて保育士になるまでの日々を振り返りたいと思います。

保育士を目指したきっかけ

小学生の時、海外の貧困層で暮らす子どもの姿を映像で見たことで、子どもの生活に興味をもつようになりました。下校時には、友人と一緒に保育園に通い、小さな友達と遊びながら先生のお手伝いをしていました（振り返ってみるとお仕事の邪魔をしていたように思います……）。そのような日々を重ねるにつれ、いつしか「大好きな先生のような保育士になる！」と、胸を張って宣言していたことを今でも鮮明に覚えています。

その後も、抱いた夢は変わらず、保育士と幼稚園教諭の免許を取得することのできる大学へ進学しました。

丹羽 瞳（にわ ひとみ）
お茶の水女子大学附属いずみナーサリー保育士。

諦めかけた夢

しかし、保育所実習などを通して、「保育士」の仕事は、夢や憧れだけではなれないことを痛感しました。

私は、本当に書き物が苦手で、実習に入らせていただく前に何度も予習はしていましたが、実際の実習では、日誌や記録に悩まされました。明け方の5時まで記録を書いたり、12ページにもわたる指導案を毎夜考え続けたり、時には職員さんから「明日までに壁面を作ってきて」と急なお願いをされることも少なくありませんでした。それでも、園に行くと「今日は何して遊ぶ?」とまぶしいくらいの表情で誘いかけてくれたり、「明日もおれらの部屋に遊びに来てよ……」と涙ながらに話してくれたりする子どもたちはただただかわいくて、そんな子どもたちの姿に「よし、今日も頑張ろう」と、何度も励まされました。そして何より、「せんせい!」と呼ばれることがうれしくてたまりませんでした。

しかし、それと同時に、思うようにできない自分が悔しくて歯がゆい気持ちでいっぱいでした。『保育士は忍耐力が必要な仕事』ということを頭では受け入れていながら、実習での日々を思い返すと、自分は保育士に向いていないのではないかと感じるようになっていました。「これが保育士の仕事なんだ……」と実感する中、友人や先輩は皆、「実習って大変だよね」「給料も仕事量も違う仕事に就きたい」と口をそろえます。保育士になる夢を諦める友人も少なくありませんでした。私もその中の一人でした。

ナーサリーでの研修

大学生最後の実習を終えた頃、「保育士では

なく、子どもとかかわることのできる別の仕事に就こう」と考えていた私に恩師から、「他にやりたい仕事をすることもよいけれど、現場に出てからが保育士。一度、ナーサリーの保育を勉強しておいで」とお言葉を頂きました。保育士になりたいという気持ちがすっかり薄れていた私にとって戸惑いもありましたが、授業等でナーサリーの保育について勉強していたこともあり、何かが変わるかもしれないという思いから研修に行かせていただきました。

初めてナーサリーに足を踏み入れた際、まず一番に感じたことは『ぬくもり』でした。玄関からお部屋の隅々まで、言葉ではうまく表現することのできない〝人〟と〝もの〟の『ぬくもり』があり、まるで実家に帰ったときのように自然と心が温かくなっていくのを感じました。職員の方々が子どもを思う心、子どもがお友達やそばにいる大人に感じる親しさに『ぬくもり』があふれており、こんなすてきな環境の中で子どもたちと時間を共にすることができたらどれだけ幸せなのだろう……そんなふうに思いながらナーサリーでの自主研修から大学へ帰ったことを覚えています。

そして、ナーサリーでの保育記録を見させていただいた際、とても衝撃を受けました。実習中ひたすら頭を抱えていた記録とは異なり、1日に、各クラスほぼ白紙のA4用紙2枚が保育室に置かれ、好きに自由に書き連ねてよいというのです。名づけて「語りあうように書く記録」。「この記録なら、毎日の保育に対する見方も捉え方も、今までとは違うものにできる！」そう直感しました。

そして気がつくと、ナーサリーで研修をさせていただいているうちに、一度は諦めた「保育士になる」という夢を実現したいという気持ちが再び強くなっていました。

その後も、私は数回にわたって研修をさせていただき、幸運なことに２０１８年度からここで保育士として働いています。

ひとりの保育士として

社会人１年目、保育士１年目の私は、保育士として働くことのできるうれしさと同時に、「自分にできるかな、大丈夫かな」という漠然とした不安でいっぱいでした。正直、今でもその不安は消えません。「保育には正解がない」という言葉をよく耳にしますが、保育士歴のない私は、自分の行動や言葉に自信をもつことができず、いつも心のどこかに不安を抱えていました。そして、いつしか気づかぬうちに「正しさ」ばかりを求めてしまい、私自身の心の不安や動揺から、子どもの気持ちを左右してしまうこともありました。

しかし今は、先輩職員の方々の助言や言動により、「保育には正解がない」という言葉の意味がほんの少しだけわかったような気がしています。また、心の片隅にある漠然とした不安に悩んで戸惑うことよりも、目の前の子どもの姿を受けとめ、子どもにとって大切なことについて考え、行動していくことが重要であると気づくことができたように思います。

初めてナーサリーに足を踏み入れた時に感じた『ぬくもり』を、これから訪れる人にも感じてほしい。そう思いながら、今日も明日も、目の前の子どもたちの成長に立ち会える喜びと、私を温かく受け入れてくださった先輩職員の方々への感謝の気持ちを忘れず、私たち若手保育士が、多くの先輩方がこれまで創り上げてきた保育を受け継ぎ、実践と経験を重ねながら次世代につなげていけるよう、子どもたちとの日々を重ねていきたいと思います。